

9 特定非営利活動法人ART NPO TACO

活動のテーマ：川辺の藁倉庫を再生する - 文化と環境の拠点づくり

活動の特徴

現代アートの活用による地域の文化や
風景の再認識



活動対象地域 高知県高知市



キーワード

建物再生 アート

団体のミッション

高知県内における様々な分野のアーティストの制作・発表活動への支援、質の高い作品やデザインの提供を通じ、地域の活性化、地域の文化水準の向上を図る。

この団体とは・・・

高知市内の残したい風景等の展示会の開催、書籍の刊行などを行ってきたアーティスト、デザイナー集団

助成対象活動の背景

古い町並みやコミュニティの破壊が進む地域において、取り壊しの危機にある蔵に拠点を構えることにより、地域資源の再生・活用の実証の場とすることを旨とする。

活動内容

- ・蔵の改修
- ・蔵の運営（ダンス公演 映画上映会 デザイナーによる展示会 ライブ フリーマーケット等）
- ・フリーペーパー発行

団体設立時期 2005年8月
代表者 信田 英司
連絡担当者 竹村 直也
連絡先 住所 〒780-0056 高知県高知市北本町4-1-23 藁工倉庫

電話 090-3784-5618
FAX 088-878-0051
E-Mail taco@xf.moo.jp
ホームページ <http://info.taco.moo.jp>

1. 団体の設立経緯と目的

高知市では、高速道路が開通した10年ほど前から急速に都市化が進行し、旧来の町並みや昔ながらの小売店舗、風景が徐々に失われはじめた。こうした状況に対し、高知市の現代アートギャラリー graffiti（オーナーは本法人理事長）が企画展として市内に残る「残したい風景・記憶しておきたい風景」を記録する「高知遺産」展を4回にわたり開催。2005年4月には同展の写真と文を書籍「高知遺産」として上梓し、県内でベストセラーとなった。また、県外でも同書は好評で、東京や大阪、横浜、高松などでも出張展覧会やトークセッションを行なうなどの反響を呼び、最終的には地方自費出版としては異例の6,500部を売り上げるに至った。

ART NPO TACOは、同書の編集グループが中心になって2005年8月に設立したNPO法人である。高知県内における様々な分野のアーティストの制作・発表活動への支援を通じ、地域の活性化や地域の文化水準の向上を図ることをめざしており、主な事業はアートイベントの企画開催や出版、アートスペース及びデータベースの運営である。

2006年7月には、ギャラリー graffiti と共に市内でも数少なくなった漆喰土蔵・藁工倉庫の一室へ事務所を設置。2007年からは本助成事業を活用してミニホール「蛸蔵」の設置運営に取り組むことになった。この蔵はかつて水運にも使われた江の口川に面し、高知の産業と歴史を物語る数少ない証人ともいえる建築だが、その用途を失って後は取り壊しも検討されていたところだった。また、この倉庫は「高知遺産」にも偶然掲載していたところであり、今回の活動は、「高知遺産」で私たちが「残すべき風景」として提示したスポットをどのように再生・活用していくのか、その

実証の場ともなっている。

厳しい財政・経済情勢下にさらされる高知県では、文化、アート、町並みといった「大切だけど、曖昧なもの」は、さらに隅へ隅へとおいやられる状況にあり、行政のみならず企業等からの支援も皆無に等しいのが実状である。今回の取り組みは、そういう意味でも価値あるものと考えている。

2. これまでの実績

- ・地域に残しておきたい風景や建造物を記録した展覧会の開催、書籍の刊行
- ・地域資源でもある藁工倉庫へ事務所を設置、活用検討

2005年4月 書籍「高知遺産」の発行

6500部を実売。現在、「高知遺産」に認定した建造物や風景の“その後”の状況をまとめた単行本の制作を検討中である。

2005年8月 特定非営利活動法人格認証

2006年4月 書籍「きんこん土佐日記」の発行

著者は本法人理事でもある村岡マサヒロ氏。制作は本法人が担当し、高知新聞社と共同出版という形をとっている。以後各巻とも実売で10,000部以上の売れ行きを記録している。

2006年8月 ホリカワアートミーティング 2006 開催

高知市文化プラザかるぽーととの共同事業。川辺でのフリーマーケットのほか、ライブ等を開催。2日間で1,000名以上の動員があった。

2006年11月 書籍「きんこん土佐日記第二巻」発行

3. 助成年度の活動内容

3-1. 活動の概要（全体像）



蛸蔵の全景



蛸蔵の内観

倉庫の改修・運用 フリーペーパー発行 アート事業実施

2007年夏 蛸蔵の改修

2007年9月 ホリカワアートミーティング 2007 開催

高知市文化プラザかるぼーととの共同事業。

コンテンポラリーダンスの高知公演のほか、

10のワークショップとフリーマーケットを2

日間にわたり開催。

2007年9月 蛸蔵の運用開始（蛸蔵でのイベントは

次項）。

2007年11月 書籍「きんこん土佐日記第三巻」「は

んこ本。」発行。

「きんこん」は初版10,000部、「はんこ本。」

は初版1,500部。

「はんこ本。」は高知県の消しゴムはんこ作家

asakozirusiさんの作品集で、はじめてamazon

での委託販売を開始した。

3-2. 活動の詳細

藁工倉庫を「蛸蔵」と命名

ほんの数年前まで藁や米が一杯に納められていたという漆喰造の「藁工倉庫」を活用し、「蛸蔵」を設置。当初はチャレンジショップも併設した複合的施設を想定していたが、ホールとして活用できる面積を十分に取ることを優先し、純粋なミニホールとしての運用を行っている。

また、助成の申請段階ではNPO主催による教室開催を中心に運用することを計画していたが、現段階ではカヌー教室や服づくりのワークショップを開催した程度にとどまっている。逆に、映画上映や演劇、フリーマーケット、ミニライブなどの使用・問合せが多い状況で、想定していた形とは若干違った方向で「蛸蔵」の認知度が上がってきている状況である。



蛸蔵の改修作業 1

なかでも、2008年1月には高知県下の演劇グループのネットワーク「演会」が蛸蔵を5月から7月まで2ヶ月間にわたり演劇祭会場として使用することが決まるなど、安価で広めのフリースペースならではの活用が中心となる気配である。

1) 設計から工事まで

検討会

本NPO理事のほか、主な利用層となる作家、隣接するギャラリー「graffiti」スタッフによる検討会を開催。絵画教室などを想定した水道設備の取り付けのほか、前面部の大型扉の設置などを決定。また、改修後の名称はART NPO TACOの「TACO」の当て字を用い、蛸蔵とすることにした。市内にあるミニホールの多くが英文字が多いこと、隣接するギャラリー graffiti との違いを明確化させるためである。また、なにより名前にインパクトを持たせたいからである。

2) 設計と建設ワークショップの開催

07年7月から8月にかけて、木造住宅建築をてがける芝建築設計事務所と共同で藁倉庫の概略設計を行った。主な工事内容は倉庫スペースの設置と、前面部の大型扉の設置であり、基本的な造作や構造については変更をしていない。これは、蔵の雰囲気を最大限に活かすということを大切にできなかったからである。

また、6月17日には建設ワークショップを開催した。申請時には近隣住民も招いて土間打ちなどの作業を行うことを考えていたが、却って改修経費が高額になることや工程の分割が予算上難しく、床面の亀裂の修復作業を鳶職の指導のもと行う形に改めた。その後も8月まで業者による工事進捗にあわせ、扉や壁の塗装作業を同様の参加者により数度実施した。



蛸蔵の改修作業 2

3) 蛸蔵の運営

9月に蛸蔵としてオープンした後、しばらくはイベントの予約などが入らない状態が続いていたが、ある程度告知も行き届いた08年年明けからは順次利用の申込みが入っている状況である。

4月28日、5月26日、6月24日 カヌー教室

蛸蔵の設計並びにワークショップと平行し、江の口川でカヌー教室を開催。graffiti との共催で、指導はNPO 法人仁淀川お宝探偵団のスタッフである。町中でカヌー体験をできる機会はそうそうなく、告知をほとんどしていなかったにもかかわらず、近隣の子連れを中心にカヌーを楽しむ模様がNHKなどで放映された。

7月1日 瀬川嶺子ダンス公演

オープンに先立ち、7月1日に高知出身でアメリカ在住のダンサーによる公演を行った。これは、改修工事前の蔵を使って行なうことで段取りを進めていたものだが、面積等の関係で本NPOが借りている駐車場用の蔵を用いての公演となった。観客動員は50名程度であった。

9月23日 蛸蔵シネマ「海でのなし」

ギャラリー graffiti 並びに自主上映団体「とさりゅうピクチャーズ」と共催による映画会。3回の上映で計170名近い観客を動員した。

11月28日～12月10日 オープニングイベント「arisode-nasasode」展

蛸蔵の独自企画によるこけら落としイベント。京都のファッションデザイナー Chika Yamamoto 氏による展覧会。川に抜ける蔵の空間の特性を活かし、天

井から吊るした服が川風でユラユラと揺れる様子を楽しむもの。ただし、展覧会の名前が示すように、ありそうでなさそうな服（たとえば、服の袖を結びつけて鞆に仕立てたものや、袖が何本もあるものなど）ばかりなので、壁面に実際に着たときのイメージを撮影したスライド映像を流して見せる工夫をした。

また、作家による服づくりのワークショップを期間中2回開催したほか、下記に示すライブも行うなど、蛸蔵の利用方法をわかりやすく明示したイベントとなった。観客動員数は芳しいものではなかったものの、本イベント後より、利用に関する問い合わせが増加することになった。

12月1日 ogurusu norihide LIVE

京都からミュージシャン ogurusu norihide 氏を招いてのライブを開催。初めての本格的なライブ運用で、音響機材については機材屋さんの理解を得て安価で借りることのできるしくみを構築した。照明をすべて落として蝋燭の光のなか、ogurusu 氏のライブでは恒例となっている全員での合唱を楽しんだ。

Ogurusu 氏によると、音の響きが非常によく、アコースティックライブにはぴったりのホールとのことであった。

12月16日 蛸蔵シネマ「予感」+ライブ「Water Water Camel」

自主上映団体「とさりゅうピクチャーズ」と graffiti による映画上映会。映画上映の前には一時間あまりのミニライブを開催。のべ200名を集客。

映画イベントの場合は入り口を川側に設定するので、開場までは川辺に設けたベンチなどでのんびりしてもらおう工夫をしている。江の口川流域では、川辺でのん



ダンス公演



arisode-nasasode 展示風景

びりできるような場所がほとんど無いので、初めて訪れる多くの客はその眺めに驚きの声をあげていた。

12月23日 フリーマーケット「かるぼいち」

飲食・雑貨など15店舗が出店するフリーマーケット。川辺にも小間やベンチを設置し、のんびりとした時間を演出した。周辺地区にも告知するため、新聞挟み込みチラシを配布した。

1月～3月

寒い時期でもあり、利用頻度が低下。この間は、打ち合わせ・会議会場としてのレンタルが月に2-3回あった程度である。

ただし、5月からの「演会」による演劇祭開催が決定し、同団体より今後改修すべき箇所についての指摘(照明機の設置や、電気容量のアップなど)を受けた。その他にも、音漏れの問題や利用頻度の低い常設のスクリーンの撤去など、今後の第二期改修に向けて必要な事項を整理し、今後改修計画を正式に立案する際にはアドバイザーとして加わっていただくことをお願いした。

ただし、これらの改修をすべて行うとすれば高額で、その財源手当をどうするかは大きな課題である。

3月10日 作家による写真制作

大型のピンホールカメラを用い蛸蔵の内部を撮影。蔵全体をカメラに見立て、扉の小さな穴から外の風景を取り込んで撮影するもので、一回蔵の中に入ってしまうと外に出ることができない不思議なイベントであった。

3月15日～16日 クラッチプレイヤーズ演劇公演



蛸蔵シネマ 会場風景

高知大、高知工科大学生が中心になって組織する演劇集団「クラッチプレイヤーズ」の、はじめてで最後の公演。2日間にわたる公演で、のべ200人を動員した。

2008年4月 ホリカワアートミーティング2008開催例年秋に開催しているものを春・秋の2本立てとしたもので、春編ではライブとフリーマーケットを開催予定

4月20日 ライブ「ノラオンナ」(予定)

graffiti 及び Bar Mosaique 主催のライブイベント

5月10日 朗読イベント(予定)

「劇団ふたりっこ」による、宮沢賢治の詩の朗読劇

5月17-18日 「シネマの食堂」小倉りさ短編集上映会(予定)

高知の伝統芸能(農村歌舞伎、神楽など)を記録し、軽快な音楽にのせて編集する映画監督小倉りさの短編集上映会。「シネマの食堂」は、自主上映映画団体ネットワークによる5月から7月まで3ヶ月間にわたり続くイベントで、本法人が中心となっておりまとめを行ったものである。

2008年5月～7月 「シネマの食堂」協力開催

高知県下の20近い自主上映映画団体をネットワーク化し、その広報や運営について本法人が中心になって協力する。蛸蔵も会場として貸出予定。

5月22日 「ギターバンド」ライブ(予定)



フリーマーケット「くらのいち」

5月24日「原田郁子」ライブ(予定)

開催場所が前年7月の瀬川嶺子パフォーマンスで利用した駐車場となる可能性もあるが、全国的に人気を誇るクラムボンボーカルによるソロライブの開催を予定している。

5月25日～7月30日「演会 演劇祭」(予定)

2008年8月～高知県の町の棚田にて、アートイベントの開催を企画

4) フリーペーパー発行

周辺地域のマップづくりについては、より効果的な情報発信の方法を検討した結果、「蛸蔵」での活動報告、本NPOの活動報告を兼ねた新聞形式での発行とすることにした。そのための媒体として、2007年12月には「Art in KOCHI」を創刊(部数は800～1,000部で、高知県・愛媛県・香川県・東京都などの50スポットで無料配布。隔月刊)した。

「Art in KOCHI」は、市内のギャラリーなどの展覧会情報をまとめてお知らせするフリーペーパーで、本報告書提出段階で3号を数える。

中面は作家インタビューやイベント告知、その他様々な企画を展開することのできるコーナーに仕立てており、この面を使った企画として、周辺地域の街歩きのみどころマップ作成に向けた取材を進めているところである。取材は高知大学の学生ボランティアによ



フリーペーパー「Art in Kochi」

るものである。

本助成申請時のメニューに従えば、本来は街歩きマップそのものの制作を優先すべきところであるが、ただ単にマップをつくるだけでは広がりがないと判断した。それよりも、アート情報の媒体(それも隔月刊で発行されることが定着している)で記事として扱うことの方が一般への波及度は高いと考えたのである。なお、これに類するものとして江の口川の地図やギャラリーマップも作成していくことにしており、これらについても取材を行っているところである。

3-3. 協力者・協力団体との連携の経緯とその内容

芝建築設計事務所 芝氏/改修工事の概略設計

改修にあたっては、工費削減と法規遵守のためのアドバイスを同事務所より受けた。同事務所は本法人スタッフとも知人関係にあるうえ、リノベーション系の工事にもある程度精通していることから依頼したものである。また、その後のイベント展開においても、出演者との調整や斡旋などを行ってくれている。

鳶職 岡本氏/建設ワークショップの講師

岡本氏は「高知遺産」制作時にも写真を提供してくれたほか、蔵の堤防側に煉瓦積のピザ釜を設置したり、イベントでやぐらを設置するなど「土木建築」的な仕事があるたびに活躍してくれる有力な人材である。当初同氏を講師役に大がかりな床工事(床土間の打ち直し)を計画していたが、工事本体を行う業者との調整の結果、工期・工費の面で折り合いがつかず、床面に多数発生していたヒビの補修、倉庫部分の壁塗りなど簡単なワークショップ指導をお願いするにとどまった。



ライブ

鉄筋ラウンジ事務所 大久保氏 / 蛸蔵の看板等の制作を依頼

大久保氏は、鉄筋と木材だけを用いて、市内の雑貨店などの門扉やテーブルなどを制作する工作師である。同氏には、蛸蔵のシンボルとなる看板と大型作業機の制作を依頼した。

3-4. 活動推進にまつわるエピソード

設備・備品・資材については、無償調達を基本とし、備品購入費を抑える工夫をしている。

これは、蛸蔵自体のテーマが「再生」であり、できるだけリサイクルやリユースで調達することが大切と考えたからである。

- ・冷暖房については市内中心部の再開発で休業することになったギャラリーより無償で譲り受けた。
- ・雰囲気のある木製の長椅子や丸椅子、飛び箱は、改装中の病院から譲り受けた。
- ・長机やパイプ椅子については、閉店した英会話学校から譲り受けた。
- ・前面大型扉の枠組みは、前年度に高知城で開催されていた「土佐二十四万石博」会場から発生した鉄骨枠を再生したものであり、はめ込まれた木材も同会場のパビリオンで床材として使用されていたものである。
- ・看板と作業用機の木材も、同様の床材を譲り受けたものを利用している。看板文字のデザインと設計はNPO側で起こし、加工と組立は鉄工職人「鉄筋ラウンジ事務所」に依頼して制作してもらった。

4. 活動の成果と課題

4-1. 目的・目標の達成度 自己採点

及第点の60点といったところである。特にオープ



会議場としての貸出

ン後数ヶ月間については、運営体制が定まっていないこともあって利用が低迷した。しかし、オープンから3ヶ月を経て知名度も上がり、1月からは問い合わせや共同企画の持ち込みが急増し、3月以降は断続的にイベントが入っている状況である。特に6月から7月にかけて2ヶ月にわたる「こうち演劇祭」については注目度も高く、その後の展開にも結びつく契機となりそうである。

申請時に考えていたアート教室や歴史教室、トークセッションなど自主事業の展開については、自主上映や展覧会といった企画が先行した形となり、具体的にはまだ進行していない。特にこの点については十分なスタッフの配置と役割分担が必要で、今年度積み残した最大の課題となっている。

4-2. 活動着手後に見えてきた課題と解決方策

1) さらなる改修の必要性

初年度の工事は、予算の関係上、倉庫・入口扉・冷暖房・電気設備など基本的工事にとどめた。そのため、防音工事や音響・照明設備などは次年度以降に持ち越した状態であり、講演会などを行うにしてもいちいちマイクなどの備品を借りる必要がある状態となっている。こうしたことから、次年度以後もこれらの設備についても段階を踏んで整備していく必要がある。

予算措置については、自主財源が理想的ではあるが、費用負担も大きいことから助成金の導入が必要と考えている。

2) スタッフの不足とその解消

もともと“現代アート”を基盤とするNPOの性格も



蛸蔵の看板

あつてか、メンバーの多くは20-30代の働き盛りであり、NPO活動やボランティア的活動に時間を割きにくいという現実と直面している。そのため、中間報告でも示していた通り、想定していたよりも自主イベントの展開は進んでいないし、様々なプロジェクトの進捗速度の遅さにぶつかっている。

こうしたことを改善するため、08年2月には高知大学の学生に呼びかけを行い、ボランティアとして20名の学生が一気に加入してくれた。この人脈をベースに、より密度の濃い活動を展開していくことができるよう体制を改めつつある段階である（ボランティア活動を正式に進めるため、大学へのサークル登録などを調整している）。

4-3. 地域内外への波及効果

高知のような地方都市では、美術館や文化ホールといった数百人単位のホールはあっても、50-100席程度の小規模ホールは多くない。また、ライブハウスなど音楽に特化したスペースはあっても、ステージ的に活用できるスペースは皆無に等しいのが現状である。

その結果、音楽関係の利用よりも、演劇やパフォーマンス、自主上映関係からの需要が蛸蔵に強く求められるようになってきている。特に今年に入ってから活動状況にこのことは強く現れており、演劇・自主上映関係者からは定期的な利用や共同企画の呼びかけが見受けられる。

4-4. 活動の継続性

本法人の最大の課題は人員不足である。蛸蔵自体を普通に運営するには問題がないにしても、自主事業の展開や十分な黒字経営とするには課題が山積しており、蛸蔵の運営そのものを担当するボランティアス

タッフの募集なども考慮する必要がある段階にきているものといえる。

また、蛸蔵事業だけに関しても、家賃支出と人件費を捻出するためには少なくとも月7-10日の運用が必要であり、この点についてもまだまだ不十分と言わざるを得ない。

4-5. 活動推進に必要とした資源の活用方法

今年度の活動は、兄貴分の組織である graffiti スタッフはもちろん、自主上映団体とさりゅうピクチャーズや演劇団体のネットワーク組織である演会などとの協力・連携のもと実施してきた。また、スタッフ周辺の人材によるイベントの招致（計画を含む）、建設作業の支援などもあり、今後こうしたネットワークを活かしていくことが肝要と考えている。

5. 今後の展開

スタッフ体制の整備こそ命

本法人の組織としての特徴は、主にアーティストやデザイナーといった、根本的には自身のスタイルを貫くべき立場の者が多いことにある。これは、たとえば書籍やイベントでの作家自身の出店時などには濃密な成果を生み出すことにつながるが、一方でNPO活動に必要な組織的な連携や、一定のボランティア精神をもった活動に繋がりにくいという弊害を生み出している。

それゆえ、いくつか同時進行しているプロジェクト単位でスタッフは集まるものの、どちらかというと地道な部分のある蛸蔵の運営や単純な事務処理作業といったことになると、ごく一部のスタッフに仕事が集中してしまう問題が発生している。

その結果、蛸蔵のレンタルや共同開催といった、あ



ホリカワアートミーティング 2007の様子

る程度これまでの実績によってもたらされるプログラムについては増えてきているが、たとえば教室やトークセッションなどの自主事業については遅々として進まないことにつながっている。

理想的なのは、当然ながら蛸蔵の広報、事業計画について責任をもって担当できる専任スタッフを置き、それをサポートするボランティアスタッフをおくことである。そして、自主事業の展開を積極的に行うことでさらに知名度をあげ、「ご近所の文化センター」としての位置づけを明確にしていくことである。また、音響設備や防音設備など一定の設備投資を行うことで、現段階では躊躇せざるを得ない夜間のライブなどにも使えるようなしなやかをしていくことが必要と考えている。

